

国際姉妹都市バーバンク市への派遣報告書

- 1 日 程 令和8年7月23日（木）から
7月27日（月）まで 3泊5日
- 2 訪問先 アメリカ合衆国カリフォルニア州
バーバンク市及びロサンゼルス市
- 3 目 的
 - （1）国際姉妹都市であるバーバンク市との連携を一層強化し、国際交流を促進することにより、グローバル社会の実現と持続可能な社会の構築を目指すこと
 - （2）将来的なデジタルクリエイティブ産業の振興に向け、高度人材の育成支援を強化することを目的に、CG やアニメーション分野などの技術を習得するための教育手法や産業連携を図ること
 - （3）米国でのSUBARUを取り巻く文化やコミュニティの現状を把握することにより、今後のSUBARUとの連携や相互PRのあり方を考え、まちづくりや地域共創のパートナーとしての関係を深めること
- 4 行 程
 - （1）バーバンク市役所及び関連施設訪問（バーバンク市長との面会含む）
 - （2）ウッドベリー大学・音響映像制作会社への訪問及び意見交換
 - （3）Subiefest2026の視察
- 5 訪問者 市長
おおた未来戦略部（国際交流協会事務局）職員 1名
おおた未来戦略部 企画政策課（秘書室）職員 1名
通訳職員 1名
- 6 訪問先での主な行動

7月23日（木）

（東京発 ロサンゼルス空港着 その後バーバンク市へ移動）

①交換留学生との面会・ホストファミリーへの挨拶

昭和59年に始まったバーバンク市との交換留学制度は、これまで40年近くにわたり

継続し実施されている事業であり、今年度は、太田市の学生 12 名をバーバンク市へ派遣した。本事業を長年にわたり継続するためには、多くの関係者の協力が不可欠であり、特に、姉妹都市委員会の皆様には、学生の受け入れをはじめ、様々な面でサポートをいただいている。

こうした関係を今後も大切に、本事業を持続的に発展させていくため、学生を受け入れたホストファミリーの方々に、挨拶を行った。



7月24日（金）

①行政視察（警察署本部・消防署本部）

バーバンク市の警察は、単に治安を守る警察というより、地域との信頼関係を重視し、地域住民と一緒に安全をつくる警察という点が大きな特徴であり、警察官を目指す若者などを対象に、チームワークやリーダーシップを学ぶプログラムが用意されている点において、若い世代と警察との接点を早い段階からつくる仕組みが、整備されている。

また、新しいテクノロジーを積極的に活用しており、ウェアラブルカメラなどは既に、導入済みであった。このカメラは、拳銃をぬいた時などに自動で録画を始める機能や、署に戻って充電を行うと自動でデータ転送を始めるなどの機能が充実している。



バーバンク市の消防は、「消防・救急」だけでなく、「地域防災・人材育成・リスク予防」まで、幅広い業務を担っていることが特徴であり、救急搬送だけでなく、現場での医療行為まで消防が担う体制が、整備されている。

また、消防士としてのチームワークやプライドを醸成するために、様々な取組を行っており、例えば、廊下の壁には印象的な現場の写真飾っていたり、階段の蹴込みに標語を掲示したり、また食堂のテーブルにはエンブレムが設置されてあったりと動機付けを推進する取組は、非常に印象的であった。

なお、警察署と消防署は隣接しており、当然情報共有が図られているため、犯罪の抑止力や地域防災に役立っている点については、非常に印象的でありかつ学びとなった。



②バーバンク市長との会談・姉妹都市委員会との意見交換

- ・市長 Tamala Takahashi
- ・図書館サービス部長 Eric Lashley
- ・図書館サービス部姉妹都市交流担当 Cindy Yee Aukin
- ・図書館サービス部姉妹都市交流担当 Leslie Sandaval

バーバンク市は、世界のメディアの中心地といわれており、エンタテインメント産業（メディア・映画・アニメーション等）の集積地であるだけでなく、治安がよく、教育水準が高く、そして公園が多いなど、大都市としての利便性があるまちである。なお、市が抱えている課題としては、交通渋滞の緩和、価格高騰による住宅不足、次世代クリエイターの育成、国際連携の強化などが挙げられている。



今回、バーバンク市のタカハシ市長と会談を行い、太田市とバーバンク市の両市が抱える課題や今後のまちづくりの方向性について共有を行った。特に、公共交通対策、災害対策、学校給食政策などについて意見交換を行い、今後も、諸課題について連携を深めることを約束した。その中でも、交通渋滞の緩和については、両市が抱える共通の課題と位置付けられており、公共交通の利用促進や自転車等の活用に対する取組など、バーバンク市で実際に検討されている取組について紹介があった。

また、本市が今後取り組むデジタルクリエイティブ産業の振興については、現状と課題を伝え、タカハシ市長に対しバックアップの協力を依頼した。なお、具体的な依頼事項については以下のとおりである。

- I. クリエイティブ人材の育成に向けた交流を推進するため、MOU（覚書）を新たに結ぶこと
 - II. CTNX（バーバンク市で開催される世界最大級コンベンション）へ太田市として出展すること
 - III. 両市で『共同デザインワーキンググループ』を立ち上げること
- ※なお、全ての依頼事項において、タカハシ市長より前向きな回答をいただく。



③ワーナーブラザーズ視察・公共政策部門担当者との意見交換

世界有数の映像制作拠点であるワーナー・ブラザーズを訪問し、映画・テレビ番組の制作現場や撮影、編集、美術、衣装など、クリエイティブ産業を支える多様な機能を視察した。優れたコンテンツを生み出すためには、クリエイターの才能だけでなく、人材、技術、設備、企業などが集積し、相互に結びつく環境が重要であると強く感じた。



④ウッドベリー大学訪問・大学関係者との意見交換

- ・総務担当 Sharon Townsend
- ・Media, Culture, and Design 学部長 Heather Flood
- ・アニメーションプロジェクト担当 Judy Kriger 教授（オンライン）

ウッドベリー大学は、1884年に創立されたバーバンク市内にある歴史ある大学であり、ビジネス・建築・デザイン・ファッションなどの学部がある。今回は、デジタルクリエイティブ産業に関連する意見交換を行うため、デザイン・メディア芸術学部の関係者と面会した。



ウッドベリー大学は、体験型学習、実践学習に非常に重きをおいており、知識や技能を持った学生を育てることはもちろん、その学生が、企業で働く際に、実際に現場で働き続けられる学生を育てることを重要視している。また、立地を活かして、地元企業へのインターンシップを積極的に行っており、そのまま単位を取得でき、かつ、卒業の必須要件にもなっている。また、AIについては、クリエイティブな発想の部分を取って替わられることのないよう、正しい使い方を指導している。

大学関係者に対し、太田情報商科専門学校の学生作品を見ていただき、非常に高い評価と称賛を得た。例えるなら、米国で開催されている展示会などで、参加できるクオリティであるとのこと。学生などの希望があれば、ウッドベリー大学での夏季講座の受け入れや



共同プログラムの実施、または合同映画祭の開催などの検討を進めたいとの意見が上がった。

今後、デジタルクリエイティブ産業の振興を推進するにあたり、ウッドベリー大学との連携は、非常に価値あるものと認識した。

7月25日（土）

①株式会社バングズーム！エンタテインメントの共同経営者との意見交換・スタジオ訪問

・共同経営者 岡田真美 氏

株式会社バングズーム！エンタテインメントは、米国にある音響や映像の制作会社。アフレコの録音制作を主としており、日本のアニメ作品の英語版を多数、手掛けている。共同経営者の岡田さんが群馬県出身の方ということもあり、今後、本市のデジタルクリエイティブ産業の振興を進めるにあたり、繋がりを深めることが有益となると考え、今回の直接訪問となった。

岡田さんとの意見交換では、アメリカでのアニメ・ビデオゲーム業界の現状を確認した。ここ10年で声優になりたい人が増え、声優の地位が高まっている様子。また、バングズームでは、「公開声優オーディション」を実施しており、この企画がアメリカ人の気質とマッチし、人気を博している様子。このオーディションは、日本の企業とタイアップすることや、アニメのプロモーションもかねて開催するなど、バリエーションが増えている。



太田情報商科専門学校の生徒が手掛けた作品を見ていただき、非常に高い評価をいただく。今後、学校や学生の希望があれば、インターンシップなどで日本の学生の受け入れを検討するとのアドバイスをいただく。また、「公開オーディション」を太田市とタイアップすることや漫画「イニシャルD」に関連したイベントの開催など、様々な企画の提案があった。いずれにしても、岡田さんには、地元に貢献したい強い気持ちを感じ、今後、太田市との連携を深め、クリエイティブ産業のアドバイスをいただくことを約束した。

②地域交通における行政視察（BRT・Waymo）

バーバンク市は、メディア産業が集積していることから、市内外から多くの交通が集中し、慢性的な交通渋滞が発生している。そのため、一つの解決手段としてBRTの整備を進めており、公共交通の利便性向上や自動車依存の解消に向けた取組を調査した。

自動車が主要な交通手段となる都市構造において、BRTを活用して公共交通の利便性を高めることにより、市民の移動の選択肢を広げる点において印象的であり、BRTと地下鉄との接続に関しても工夫されている点は、印象的であった。単にバスを走らせるのではなく、公共交通を一体的に捉えている点に大きな意義を感じた。



また、自動運転による配車サービスを展開する Waymo の取組について視察するとともに、実際に自動運転へ乗車し、運行状況や利用者目線でのサービスを体験した。実際に乗車してみると、発進・停止・右折・左折・周囲の車両への対応など自動で行っており、すでに市民の日常の移動を支えるサービスとして実装されていることを実感した。



③Subiefest2026 の視察

このイベントは、2006 年より始まり、全米からスバルオーナーやファン、関連企業が集まる、スバルを核とした大規模なコミュニティイベントであり、カリフォルニア州アルカディアの Santa Anita Park を会場に実施している。



技術セミナー、家族向けアクティビティ、各種コンテストなどを通じて、スバルを共通の価値観とするファン同士の交流を促進するイベントであり、スバル本体、モータースポーツ関係者、販売店・パーツメーカー、そしてファンなどが一堂に会し、「車を媒介とした企業と地域・ファンとのコミュニティ形成」という点が、大きな特徴といえる。

SUBARU が単なる自動車メーカーでなく、ファンや地域をつなぐ「コミュニティの核」になっており、参加者が主体的にイベントを作り上げ、企業とファン、クラブ、地域が一体となったコミュニティが自然と形成されており、文化として認知されている。自動車の展示や走行だけでなく、家族向け企画や技術セミナーなど、いわゆる SUBARU マニアだけでなく、多世代が楽しめる場として工夫されていた。



7月26日（日）

（ロサンゼルス空港 発）

7月27日（月）

（東京 着）

7 派遣成果について

今回の派遣における最大の成果は、バーバンク市との関係性に関し、姉妹都市としての友好関係を基盤としながら、地域課題を共有し、その解決に向けて実践的な連携を進める共通認識が醸成されたことである。これまでの交流は、文化や親善を中心としたものであったが、今後は行政、大学、教育機関など多様な主体が参画する「政策連携」へと発展させることが期待される。

特にデジタルクリエイティブ分野における教育交流や人材育成、企業間ネットワークの構築、産学官連携による共同プロジェクトなどは、両市が相互の強みを生かしながら、成果を創出できる可能性が高い分野であることが確認された。

将来的には、太田市を世界へ羽ばたくクリエイターを育成する「グローバル人材育成の起点」と位置づけ、バーバンク市との連携を通じて、学生や若手クリエイターが米国の最先端の技術や創造的な文化に触れ、国際的な視野と実践力を身に付けられる環境を整備していく。そして、海外で活躍する人材が、太田市の学生や若手人材に知識や経験を継承するほか、世界で培った技術やネットワークを携えて太田市へ戻り、新たな産業やビジネス、教育、人材育成の担い手として活躍する「人材還流」の仕組みを構築していきたい。